

佛種姓經に就いて

立 花 俊 道

- 一、漢藏中唯一ヶ所に名を現はす本經
- 二、本經の内容、二十五佛の小説史
- 三、巴利佛敎は二十五佛二十八佛外の佛を知らず
- 四、増一阿舎に見ゆる七佛外の佛
- 五、本經の一佛品の内容
- 六、大本經の七佛傳と本經二十四佛傳との比較
- 七、本經は大本經に型を取り、大本經は釋尊傳に型を取る

一、『佛種姓經』は巴利語聖典三藏中、經藏五尼柯耶の一なる屈陀迦尼柯耶中に含まるる十五經の一とされて居る。『佛種姓經』の名は漢譯藏經の中では『善見律毘婆沙』第一卷の中に現はれて居るが、この外他にこの經の名の出る所は恐くあるまいと思ふ。これは巴利佛教と支那佛教との直接交渉が、古來割に少かつたこと、隨つて又巴利佛典の直接漢語に譯された例の極めて稀なりしことを物語れるもので、『善見律』はその原本の巴利語なりしことを完全に證明し得るものとしては殆ど唯一無二の漢譯聖典である。他にも『法句經』、『解脫道論』、『義足經』その他の如き、巴利語原典と漢譯本とがよほど接近して居る例もないではないが、原譯の關係が『善見律』ほど確實ではない。この意味に於てこの書は漢藏中にも特に珍重さるべき性質のものである。

二、『佛種姓經』は原名を Buddhavamsa としふ。Buddha は勿論佛陀、勃陀、浮圖、浮屠或は略して佛といひ、譯して覺者、智者といふ。覺りたるもの、眞理に到達したる人の意である。Vansa は本來竹の幹、節などの意であつたが、それから轉じて、系統、家系、種族、家族、傳統、王統、その歴史等尙ほ他に多種多類の可なり複雑なる意味を有つこととなつた。巴利文學中には Vansa の名を附せる書が可なり多いが、その大部分は錫蘭にて作られたるものなることは注意の値がある。西紀前五四三年より西紀後三〇一年に至る約八百五十年間の錫蘭王統の歴史を載せたる Mahāvamsa (大統史) と Dipavamsa (島史) の兩書を初めとして、 Dāthāvamsa (佛齒史) これは今尙ほ錫蘭キヤンデーの佛齒寺に奉安してある佛齒の因緣由來を記せるものである。Sāsanavamsa (教史) とは錫蘭、緬甸、暹羅三國の佛教の歴史、〔Mahā〕Bodhivamsa (大菩提樹史) とは錫蘭アヌラダプラにある大菩提樹の歴史を記せるもの、Anagatavamsa (未來史) とは當來出世するべき彌勒佛の傳記で、言はば、この『佛種姓經』の續きである。彌

勅佛に就ては『佛種姓經』中唯一言「余（釋尊）は今正覺者なり、彌勒も亦「正覺者」とならん」といつてあるが、『未來史』はこの言を敷衍し、『佛種姓經』の記に倣つて當來佛の事を未來記的に述べたものである。Gandhavamsa（書史）は經律論の三藏以下の根本聖典は勿論のこと、迦旃延、佛陀瞿沙乃至十五六世紀頃の作かと思はれる巴利書の著者に至るまでその著書、内容、著者の出身地等に至るまで、委しく説明してある。斯うして Vamsa といふ語は多くの場合に於て「歴史」、「史傳」、「由來記」、「因緣物語」等の意味を有つやうになつた。

Buddhavamsa とは瞿曇佛即ち釋尊並にその以前に出世された二十四佛、所謂過去諸佛の史傳を記せるものであるが、釋尊を除ける他の二十四佛は全くの小説的假作の人物で、素よりその史傳などいふべきものあらう筈はないのである。實際史上の人物でなく、假作された二十四人の佛陀の傳を傳説史、小説史的に書き綴つたのがこの Buddha-vamsa であると思へばよい。全篇二十八品より成る。第一品は「寶珠經行處品」と稱して。世界の主宰者にして娑婆の長たる梵天王が世尊に對して、「ここに眼の塵穢に覆はるること少き質の有情あり。この聾を愍みて法を説かせたまへ」と申せるに答へ、「來れ、汝に無上の佛力を示さん、寶珠を以て飾りたる經行處を空中に化造せん」と宣ひ、釋尊が寶珠の經行處を虚空の中に化作し、その上に經行され、天人非人の類がこれを禮讚することを説いたもの、これと次品以下に記せる燃燈佛以下二十五佛の傳と如何いふ關係があるか、了解出來かねることである。且つその偈文も至つて拙劣で、非文法的で、重複の箇所が多くて、意味不明瞭で或は後人の手に成れるものが、此處に竄入せるに非るかを疑はしめる。第二品より第二十六品に至る二十五品には各品一一釋尊とも二十五佛の傳を載せ、二十七品は燃燈佛以前の出世にかかる作愛、作慧、作歸依の三佛以下二十八佛の出世時代、而して最後の第二十八品には釋

(4)

尊の滅後行はれた舍利、瓶、灰、四齒の配分の事を載せ（大般涅槃經第六誦品二四—二八）、更に鉢、杖、法衣その他釋尊の受用物の跋日羅^{ワヂライ}その他の諸所に配分されることをも説いてあり、『大般涅槃經』に説かざることをも多く此處に説いてあるが、これは偶この書が『涅槃經』などよりは遙かに後世の作であることを思はしめるものであると云つて宜しからうと思ふ。

三、巴利佛敎には二十五佛と二拾八佛とが出て來ることは上に既に云つた。二十五佛とは燃燈 (Dīpankara)、橋陳如 (Koṇḍañña)、曼伽羅 (Mangala)、須摩那 (Sunana)、離婆多 (Revata)、蘇毘多 (Sobhita)、アノーテムン (Anoma-dassi)、波頭摩 (Daduma)、那羅陀 (Nārada)、蓮華上 (Padumuttara)、善慧 (Sumeḍha)、善生 (Sujāta)、喜見 (Piya-dassi)、義見 (Athadassi)、法見 (Dhammadassi)、悉達多 (Siddhatha)、帝沙 (Tissa)、弗沙 (Phussa)、毘婆尸 (Vipassī)、尸棄 (Sikhī)、毘沙浮 (Vessabhū)、拘留孫 (Kakusandha)、拘那含牟尼 (Koṇāgamana)、迦葉 (Kassapa) の二十四佛に、瞿曇佛 (Gotama) 即ち釋尊を加へたものである。これに更に作愛 (Tanhankara)、作慧 (Medhankara)、作歸 (Saranankars) の三佛を加へたものが二十八佛で、巴利佛敎で謂ふ所の佛陀とはこの二十八佛限りとして、他に佛陀あることを知らないのである。若し強ひて他に佛ありとすれば、それは當來世に出世して佛道を成すべき彌勒^{メッセイヤ} (Metteyya) 菩薩であらう。この當來佛彌勒は巴利三藏中にもその名を見出す。唯一例ではあるが『長尼柯耶』轉輪聖王師子吼經の中に左の文がある。

「比丘等よ、人壽八萬歲の時、彌勒^{メッセイヤ}と名くる應供、等正覺、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人士、佛世尊なる如來世に出現せん」（長阿含經卷六轉輪聖王修行經參照）

この二十四佛の名まへだけは『大統史』(一の六)、『法句經註』(一卷八三四頁)、『増一阿含註』(五二二頁等)に出で、その傳記ともいふべきものは初めてこの『佛種姓經』に載せられ、更に『本生經』の序文なる『因縁物語』の中に引かれて居る。『因縁物語』の中に引かれたのは、第一燃燈佛に關する分は全部であるが(二三偈を除けば)、憍陳如以下二十三佛に關する偈文は一唯その初の一偈のみで、第二佛憍陳如の例を擧ぐれば、

「燃燈〔佛〕の後に憍陳如と名くる導師あり、威光無邊、名聲無量にして計るべからず、勝ち易からず」といひ、第十佛蓮華上佛では、

「那羅陀〔佛〕の後に、兩足尊の正覺者、蓮華上と名くる勝者あり、大海に譬ふべく撼かすこと難し」と云へるの類である。

『佛種姓經』には燃燈佛以下釋尊まで二十五佛の史傳を記しながら、この佛以前に出世された作愛、作慧、作歸依の三佛に就ては、上に既に述べた通り、第二十七品に、

(5) 「今より不可測劫前、四人の導師あり、作愛、作慧、更に又作歸依と、燃燈正覺者とこれ等は同一劫中の勝者なり」といつて、唯その名まへと出世時代とを擧げるに止めてある。これはこの三佛は燃燈佛の先輩ではあるが、過去世に於て今釋迦牟尼佛のために未來成佛の記別を與へられたことがなかつた。この記別の初まりは燃燈佛の時であるので、この佛からして傳記の記述が初まつたのである。さればこの『佛種姓經』は過去二十五佛の傳記を載するものだが、釋尊が初めて未來成佛の誓願を起されて以來、語を換へて言へば、佛道成就の記別を初めて得られて以來、奉侍された佛の數とその授記の事由とを録せるものと見ることが出来る。成佛の誓願とは發心、發菩提心即ち菩薩行の發端で

あるから、この書は釋尊に取りては發心より成道に至るまで即ち菩薩行中の全過程と、更にその入滅までの事を記せるものであるから、これを釋尊本位の書として見れば、又となき興味深き書だといふことになる。

四、上に述べた通り、二十四佛の名まへは巴利文學中諸所に發見されるが、これを載するもので三藏中に攝せられてゐるものは『佛種姓經』の一あるのみで、他は三藏の註釋書か歴史の類であり、その製作年代も遙かに後世のものである。即ち四種の律書にも五種の尼柯耶にもこの二十四佛の列名は出て來ない。これは漢譯にしても同様で、過去七佛の名は四阿含中、『長阿含經』の一卷一經、『雜阿含經』十五卷二經三經、『增一阿含經』四四卷の二經等の諸所に出來るが、その他の十七佛中、燃燈佛が、錠光、燈光、提和竭羅等の名で、『增一阿含經』中五ヶ所に現はれる外、他は一として見る所がない。しかしこの『増一』には寶藏如來(三ひのひ)が現はれて、燈光如來に記別を授けるとか、奇光如來(二九の二)が現はれて目連の神足第一を證明するとか、善念誓願如來(一八の九)が出て無量の諸佛を化作するとか云つてあり、小乘、三乘、眞如法などの語もあり、女人成佛(三八の二)の話もあり、佛が彌勒菩薩のために四法本六度を具足して無上菩提を成ずることを説かれた話(一九の六)もある。随つてこれは原始聖典とは見做され難い、況んやこれを原始佛敎研究の資料と見るは更に難いことである。四阿含中『增一阿含』は兎に角特別の注意を要する書である。

二十四佛の列名は漢譯四阿含中は勿論、他にも一ヶ所として出て居ないといふことは(一)南北佛敎の分離が比較的早かつたこと、(二)巴利佛敎と漢譯佛敎との交渉が大へんに少かつたこと、而して(三)二十四佛はずつと後に至つて出來たものであることを物語れるものだと思ふ。随つてこの二十四佛の小説的史傳を載する『佛種姓經』の巴利五

尼柯耶の一なる屈陀迦の中に攝められてることが不自然だといふことになる。獨りこの『佛種姓經』ばかりでなく、屈陀迦の中には不自然の竄入かと思られるものが多々あるやうである。由來『屈陀迦尼柯耶』なる語は小集の意であるが、これは分量の意味の小ではなく、重要味の小さな經典（或は眞の意味の佛說經典に非るものまでも）雜然と集めたものといふ感じを吾人に與へる。實際この屈陀迦尼柯耶は小集でもあり雜集でもある。要するに『佛種姓經』は原始經典ではなく、四律四尼柯耶の成立よりはよほど後れた時代、上にも述べたやうに Vansa 文學時代に製作されたものと見るべきだと思ふ。

五、『佛種姓經』は二十五佛の史傳、小説史、傳説史だといふが、それは如何いふ體裁に出來て居るか。燃燈佛より瞿曇佛までの二十五佛を順次に偈文を以て傳記したものである。偈の數は燃燈佛の如く二百二十の多きもあり、悉達多佛の如く二十五の少數なものもある。しかし大概は三十前後で、それは大凡次のやうな内容を持つて居る。これは燃燈佛の次なる僑陳如佛の傳で、三十八偈より成る。この三十八偈の中、一一八の八偈は僑陳如佛のこと、九一二四の十六偈は釋尊の前身に關すること、二五—三八の十四偈は又僑陳如佛に關すること、總て現釋尊の口より説かれたものとなつて居る。

一—三、燃燈佛の後に僑陳佛出世、威光無邊、名聲無量なり、忍は天地に、戒は大海に、定は須彌山に、智は虚空に比すべし。根、力、覺支、道、諦に就て、一切有情利益のために「法を」説けり。

四—六、佛の法輪を轉するや、第一次に法を領會したるもの一兆、人天のために法を説きしや、第二次に法を領したるもの九千億、外道等を挫きて法を説くや、第三次の法領會者八千億。

(8)

七——八、漏盡離垢靜心の比丘の集り三あり、第一會は一兆數、第二會は一兆數、第三會は九億。

九——一〇、余(釋尊)はその時甚勝者と呼ぶ王種にして海内を支配せしが、離垢の大仙等を佛と共に供養したり。

一一——一二、佛余のために、無量劫の後勤むべきを勤め、難きを行ひ、阿説他樹下にありて佛陀たるべきことを豫言して曰ふ。

一三——一七、「母は摩耶、父は淨飯、彼は瞿曇と稱せん。拘利多、優波帝沙は二大弟子にして阿難陀は侍者、識摩と蓮華色とは二大弟子、菩提樹は阿説他と稱せん。質多羅と呵多阿羅婆とは上位の常侍信士、難陀母と鬱多羅とは上位の常侍信女、而して瞿曇の壽命は一百歳ならん。」

一七——二一、これを聞きて人天共に喜び、十千世界の天子は合掌禮拜して云へり、

「よし吾等この佛(橋陳如)の教を失はんとも、未來世に瞿曇佛に逢はん。河を渡るもの對岸の渡場を見失はば、下岸の渡場を指すが如くに」。

二二——二四、この語を聞きて余が心は澄み、大王國を捨てて「橋陳如」佛の許にて出家し、經律一切九分の佛語を習ひ、神通の極に達して梵天界に生れた。

二五——三四、「橋陳如」佛の都は有樂、父は善喜といふ王、母は善生、一萬年間在家の生活を營み、三時殿あり、三十萬の姝女、喜天といふ妃、勝軍といふ子實子あり、四相を見て出家し、十ヶ月間の正勤を行へり、梵天の請によりて法輪を轉じ、賢、善賢と呼ぶ二大弟子、阿菟樓陀といふ侍者、帝沙、優波帝沙の二大女弟子あり、サーラカツリヤーナ菩提樹、須那と優波須那とは常侍信士、難陀と室利摩とは常侍の信女なり、身長八十八肘、世壽十萬年、この

世に存して數多の人を度したり。

三五、大地は漏盡離垢の人人によりて飾られ、天の月あるによりて美はしきが如く、彼(橋陳如)亦美はしかりき。

三六——三七、彼の無數の龍象たちも雷の落つるが如くに入滅し、勝者(橋陳如)の神通禪定共に滅無に歸したり。げにも諸行は空なり。

三八、橋陳如佛は月園チヤンダにて入滅し、塔あり、高さ七由旬なり。

以上は橋陳如佛品三十八偈全部を順次に抄譯したものであるが、全篇他の佛に關する條もこれと大同小異であると見てよ。

(9)

六、二十五佛のことは巴利三藏にも(佛種姓經を除き)漢譯三藏にも出て居ないが、その後の七佛即ち毘婆尸佛乃至瞿曇佛は巴利『長尼柯耶』二卷一—五四頁、『雜尼柯耶』二卷五—一二頁、漢譯『長阿含』一卷一經、『雜阿含』一五卷二、三經『增一阿含』四四卷二經の諸所に出て居ることを私はいつた。今『佛種姓經』のこの三十八偈と『長尼柯耶』の大本經第一誦品とを比較して見ると、大本經には七佛各各の出世された劫(四)、生れ(五)、姓(六)、壽命(七)菩提樹(八)、二大弟子(九)、會座(一〇)、常隨弟子(一一)、父母都城(一二)と、斯ういふ事柄を記してあるが、これはこの三十八偈の中にも大體二回記してあると云つてよいと思ふ。即ち(一)は九—二四偈の中に、後身釋尊に關する橋陳如佛の記別の中に、(二)は二五偈以下の釋尊の口から出た橋陳如佛の事に關してとである。(一)では今この王種は無量劫の後瞿曇と呼ぶ佛となるであらう、それには母父、二大弟子、常隨侍者、二大女弟子、菩提樹、二大侍信士信女、壽命は誰某又は何何といふ豫言であり、(二)では橋陳如佛の都城父母、在家生活の期間、三時殿、姝女、妃子

四相を見て出家而して成道の事、梵天勸請、二大弟子、二大女弟子、菩提樹、常侍信男信女、身長世壽、入滅立塔といふやうなことで(一)の記別の場合よりはよほど詳しくなつて居る。

私はここに過去七佛と瞿曇佛と憍陳如佛と、三種の傳を擧げたが、これ等を通覽して奇異に感ぜらるることはこの三が詳略の差はあるが、その内容順序とも殆ど同一であるといふことである。なんぼこれが「諸佛常法」(Buddham Dhammata)といつた所で、二十五佛が二十五佛とも、斯くも内容同じく順序同じき生活過程を辿られるといふことは全く奇異でなくてはならぬ。前にも述べた通りこれ等二十四佛(釋尊を除く)は本來歴史的人物ではなく、架空的構造人物であるから、その實傳など本來あるべき筈なく、その所謂傳なるものはもとの型があつて、他は皆この型によつて作られて居るものと考へざるを得ないのである。否斯う考へるのが一番自然である。

七、過去七佛の話は古くからあつたらしいが、二十五佛又は二十八佛説は佛滅後ずつと後になつて出来たものである。而してそれをそれ／＼説ける『長尼柯耶』又は『長阿含』は『佛種姓經』に遙かに先じて成立したことは素より論はない。これは種種の觀點からして證明し得られるが、前者に無くして後者にあるもの、例へば「正法領會」、「常侍信男信女」説などもこれに加へらるべきではないかと思ふ。上の憍陳如佛品四一六偈の三次の法領會 (Dhammabhisa mayā) は釋尊傳になく、七佛傳になきもので一體何を指すのであるか。私はこれを譯するに當惑して Abhisamayā を單に Samaya (集會) の意に取つたかと思つて見たが、「集會」ならば、次に Samipāṇā の語が出て來るし、特に轉法輪と連關して居るから、やはりこれを法領會、正法を理解して佛道信仰の人となるの意と解した。常侍信男信女も亦奇であるが、これは例へば釋尊に對する阿難陀アナンダの如く、常住執事の出家の侍者ではなく、在家の信男信女で、不

斷佛に隨侍し、説法を聞いたり、供養したりをしたものであるらしい。この二例だけでも釋尊傳にも七佛傳にも特に擧げられてないものである。

過去七佛の話は二十四佛の話よりは古く、前者は後者に取りて原型となつてゐることもあり得ると思ふ。所が今一つ此處に考ふべきことはこの七佛説は果して根本原型であるか、語を換へて言へばこれの型となつてゐるものが他にありはしないかと云ふことである。

大本經には釋尊の語として（第一誦品一七偈以下）毘婆尸菩薩が兜率天より降つて母妃槃頭摩提パシツクマテイの胎に宿られてから、四王天が母子を守護し、母妃が五戒を持ち五欲を享け、安穩にして病なく、胎中の菩薩は外より見ることを得べく、在胎十ヶ月にして安産あり、而も母妃は立ちながら産まれたこと、天子がそれを受取つて祝福したること、初生の太子は清淨にして些の汚れもなく、冷熱の二水天より降りて太子の身に灑ぎ、太子は周行七歩して、

「吾は世界の第一人者なり」

といふ語を述べられたこと、その時光明人天世界に現はれたること、母妃は出産七日にして逝去せられしこと、相士の太子を占相して佛陀か輪王かの二途あることを述べたること、三十二相・侍女、迦陵頻伽カラクマカに似たる美はしき聲ありしこと、太子は生れながらにして天眼あり、瞬きせずして物を見たること、三時殿ありしこと、（第二誦品）四門より出遊して老病死者沙門の四種人を見て出家し、十二因縁を順逆二次に觀じ、出家生活に入りて後その結果として「煩惱の執著を離れて心解脱し」大悟徹底して毘婆尸佛となられたこと、（第三誦品）毘婆尸佛は折角悟を開きながら説法に躊躇された。即ち吾が所得の法は難見難解で、假令これを説くとも無明の暗に閉されたる有情等はこれを解せ

ず説法も寧ろ徒勞に歸すべしといはれる。其所へ大梵天王が現はれ、世には法を聽いて了解するものも少からずあるでせうと言つて三たび勸請すると、佛は説法を許諾し、何人に對して法を説くべきやを詮索して、王子カシタ鶯茶と王師の子オイツカ提舎とを得、安樂鹿野苑に入りて彼等のために次第説法なるものを説かれ、その結果として二人は遠塵離垢の法眼を得た。二人は共に出家したが、これがこの佛出家弟子の初である。二人の出家を聞き八萬四千の大衆は出家して悟を開き、更に八萬四千と六百八十萬との徒輩は毘婆尸佛の許にありて出家した。佛が二人一路を行くことなくして天下に遊行せよといふ教を説かれたのもこの頃のことである。

此處に毘婆尸佛に就て説かれた兜率下生、入母胎、誕生、占相、三時殿、四門出遊、出家、苦行、成道等の事は釋尊の傳として各種の佛傳は勿論のこと、一連の傳としてではないが、斷片的には『中』、『雜』、『増一』その他の諸經にも散見する所である。而して成道以後迦毘羅衛城歸郷まで約一ケ年間のことは各種の律にも出て居て、唯その人物や場所が變つてゐるだけで、過程の内容や順序は殆ど變る所がない。斯うして釋尊の傳も他の六佛の代表者たる毘婆尸佛の傳も二十五佛中七佛を除いた他の十八佛中、何れの佛の傳も大體が變つて居ないとすれば、この中どれかが本でどれかが末、即ち原の型と模した型があるではないかといふことになると思ふが、釋尊は歴史上の人物で、八十年の生涯をこの土に送られた方だとすれば、その傳記が一番事實に即して居ると見ねばならぬ。現在の經律や佛傳中に傳ふる釋尊の「所行」は實際の「所行」の事實的描寫ではないかも知れぬが、これを覆すほどの反證の擧らざる限り事實と見做さなければならぬ。そこで私は思ふ、大本經の毘婆尸佛傳は釋尊傳を模したるもの、而して二十四佛傳はこの毘婆尸佛傳を模したるものである。釋尊は大本經を説かれた時、「諸佛常法」といふお考からして御自身の傳を

本として毘婆尸佛の傳を説かれた。後世の『佛種姓經』作者は又この毘婆尸佛傳を骨子とし（それに大本經の前半なる七佛傳を加味して）筋肉を附けて作り上げたのが、この二十四佛の傳であると私は考へる。大本經の毘婆尸佛傳も『佛種姓經』の二十四佛傳も、諸佛傳中に見ゆる釋尊傳も、その内容順序並にその長さに於て大體一致し、例へば釋尊傳では釋尊の舍利弗目連の二大弟子を得られ、迦毘羅衛城へ歸つて父王を省せられるといふあたりで、皆終りに達して居り、他の佛の傳、例へば大本經の毘婆尸佛傳は更にそれ以前、諸大弟子を傳道のため諸方へ派遣されるあたりで盡きて居るといふのも理由がある。即ちそれにはその原型となれるものがあつて、それがこの邊りで盡きて居るか、らだといふのが私の決論である。